

---

# 世界を周るは転生者(チート) i n 恋姫無双

チルノ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を周るは転生者<sup>チート</sup>in恋姫無双

### 【Nコード】

N1811BA

### 【作者名】

チルノ

### 【あらすじ】

リリカルな世界のお話。

まだ書いてないがStsのあと転生して此処に来た感じです。

ここでは魔法はほとんど使いません。よくて治癒とかです。

では桜花君の激動の恋姫物語！はじまりはじまり！

でもやっぱチート・・・

## プロローグ(前書き)

同時進行です。けいおん！のへまはもう犯さない・・・！！！！

## プロローグ

はいどうも、毎度おなじみ桜花君です。えー現在リリカルな世界でも活躍している俺ですが。

同時進行で恋姫の世界に来た話しをしたいと思います。

あ、でね？予断なんだけど、転生の度に性格が変わる見たい。肉体に精神が引つ張られる感じで、まあ容姿なんていくらでも変えられるんだけどね？で、今回は優しいお兄さんだつて！！だからリリカルの方とはかなり別人となつてるよ！気をつけてね！？

「さて、お知らせ的なのも終わったところで・・此処はどこかな？」

目の前に広がる広大な荒野。どうしようかと考える。

すると、後ろから気配がして振り返る。そこには原作でも見る三人の賊。

「兄ちゃん、珍しいもん着てんじゃねえか……金目のもんと一緒に身ぐるみ置いて行きな！」

「早く、渡した方が身のためなんだな！」

「オラオラ！早くしろよ！！！」

ふむ、確かに俺の現在の衣装はリリカルの時のバリアジャケットとほぼ同じだ色は多少変わったが。

この国にはこんな服は確かに存在しないだろう。ん？よく見ると

俺の下に倒れている人がいる。

こ、こいつは！あの恋姫主人公にして種馬！北郷一刀じゃまいか！！

「おい、おい！起きろ！」ぺちぺち

「うん．．．はっ．．．ここは．．．？」

「とりあえず、立てるか？」

「あ、ああ．．．ありがとう．．．えとあんたは？」

「ああ、俺は．．．そうだな、性を風、名を華、字を衝だ風華と呼んでくれ。」

「あ、ああ（この人の名前．．．此処は日本じゃないのか．．．）、え〜と、俺は北郷一刀。性が北郷で名が一刀になる。字はない。」

「あ、自己紹介中悪いけど今そんな状況じゃないんだわ。」

「え？」

一刀君が後ろを見るそこには無視されまくって、怒りまくってる賊の三人。今にも切りかかってきそうだ。

「えええ！？何この状況！？」

「一刀君、君は刀使える？」

「え？あ、はい一応」

俺は空間から二振りの太刀を取り出す。二対一刀の双刀、黒刀と白刀だ。その内の白刀を手渡す。

「君には辛いかも知れんが、覚悟を決めてくれ。」

俺は一刀君にある覚悟を迫る、別に今じゃなくともいいが早くに決めるに越したことはない。

「……………人を殺す覚悟を」

「え？どういう…？なっ…まさか!？」

一刀君が驚いている。

「人を殺す覚悟だ。」

一刀君が沈んでいる。悩んでいるようだ。

「ま、嘘ですけどね」「ずしゃあ！」

そう言っつ俺は三人の賊を一瞬で切り払った。

「んなっ…!？」

「じゃ、話を続けようか。」

一刀君は白刀を返してくる。俺はそれを受け取りしまっ。

結論から言えば、一刀君は俺に付いてくることになった。行くあても無いから当然か。

そう言えば、一刀君が荒野で襲われてる時趙雲さんとかが助けに来るはずだけど・・・来ないね。  
今がいつの時代なのか確認しないと！

「なあ一刀？とりあえず村に向かうぞ？いいか？」

「いいよ、桜花。まかせる」

ちなみに俺と一刀は真名を交換しました。

「んじゃ行くこうか。」

そうして二人は歩き出す。

これが天の御使いと後の最強の単騎戦力の旅の始まりだった。





二話にして別離！？そして出会う曹操（前書き）

なんか、展開が読めない・

## 二話にして別離！？そして出会う曹操

結論から言うと、俺と一刀は旅の道中いろいろなことを話した。

この世界が一刀いわく（俺も知ってるけど）三国志と言う時代と言うコト、一刀が未来から来てこの世界の未来を知っている事。

今は原作の12年ほど前であること。など俺の事はまあほどほどに教えた、知識があることは内緒、力の事も内緒だけど。まあ、性格面や何をやってるか？とかね。そんなこんなで村に着いたと思ったら、街についた。未来の霸王、曹操の故郷っぽい。

「ま、結果的には良いつてことで。曹操さん家に挨拶行こうか。」

「そうだな。俺も今の時代の曹操に会ってみたいし。」

「じゃ、決定。行こう」

「ああ」

・

・

・

「でも、お前聞いたか？」

「なにを？」

「なんか、どっかの占い師がこの漢の時代を救う天の御使いつてのが来るって言ったらしいよ？なんでも見たことない格好してるんだと。これお前の事じゃね？」

「え、マジか・・・多分そうだな・・・どうすればいいんだ？こついつとき」

「知らん。だが・・・まあ、仕官する分には問題ないだろう。なんせ未来つてのを知ってるんだし？」

「そつか・・・」

なんか一刀君が思い耽ってる・・・まあ、なにか思うことがあるんだろつね。

「さ、着いたよ。すいまつせーん！誰かいますかい？」

「あら？誰かしら？」

あらら、曹操さんに似てる女の人だ。おそらく・・・母親かな？

「ん～・・・天の御使いさんとその付き人です。」

「ちよつ・・・!?!？」

「へえ・・・天の御使いさんが何の用かしら？」

彼女の目が細くなる、品定めしているような感じだ。

「いえ、ちよつと挨拶に。よければこの仕官しようかと。」

俺は一刀に今は俺に任せるとアイコンタクトを送る。

「あら、そうなの？・・・確かに占い通り綺麗な服を着てるわね・・・」

「でしよう？どうでしょう？」

「・・・」

一刀君が黙ってる。天の御使い少しは喋れよ。

「証拠はあるのかしら？天の御使いたるその証拠は？」

「ふむ・・・この天の御使いは・・・そうですね、隠すことも無いでしょう。この人はこの国の未来を知ってます。」

「なっ・・・！？そう・・・それは本当・・・みたいな。嘘をついてるようには見えないし。」

「ですか。あ、申し遅れました俺は性を風、名を華、字を衝と言います。こっちは」

「あっ・・・お、俺は北郷一刀。性が北郷、名が一刀だ、字はない。」

「ふうん・・・そ 私は性を曹、名を映、字は震よろしくね？」

「ええ、よろしく願います。では」

そう言い、俺は一刀を残して去る。すると一刀と曹映さんがひきと

めてきた。

「え？待ってくれよ。桜花？」

「あら？貴方は来ないの？」

「ええ、俺はここに士官はしません。それにこの方とも別々の道で進もうと約束しましたしね？」

「ふうん、まあいいわ。」

・・・一刀がなんか話したそうだ。しかたない・・・

「じゃあ、少しこの方と話しても？」

「ええ、良いわよ。」

「じゃあ、少しだけ」

・

・

・

「どづいつことだ？桜花？」

「俺は、この時代の未来を知らない。でもお前が話してくれた中で  
は曹操ちゃんが一番の勢力になるんだろっ？」

俺は、ここに来る途中少しだけ一刀に未来を聞いた。知ってるけど

「あ、ああ・・・」

「なら、お前はそこに居た方がいい。一番安全だし、暮らしにも余り困らない。仕事さえできれば置いてくれるだろ。」

「なら、お前も残ればいいじゃないか！」

「俺は残らない。もう少しだけこの世界を見て旅がしたいんだ。」

俺は一刀にそう言う。

「そうなのか・・・」

「そう心配するな。大丈夫、俺は死んだりしないよ。この世の中は確かに物騒だ、でも俺は大丈夫。だからお前は生きてくれ。俺はお前の事を親友だと思ってる。だから生きてほしい、お願いだ一刀。」

俺は真剣に一刀と向き合う。

一刀はしばらくうつむいていた後、顔をあげてこういった

「分かった。だから俺と約束してくれ。必ず、生きてまた会って。そう約束してくれ！」

「・・・分かった。良いよ、必ず生きて、また会おう！一刀！」

「ああ、ここまでありがとう。約束だ、親友！！」

「おう・・・じゃ、またな。」

そう言っただけはまた去ろうとするとまたも引き留められた。

「ちょ、ちょっとまってくれないかしら!!?」

「え？曹映さん・・・えと・・・なにか？」

思わず聞き返してしまう。どうしたんだろう？

「はあ・・・はあ・・・あの、うちの娘の曹操を見てないかしら・・・！」

「曹操・・・ちゃんですか？」

「見てないよな？桜花・・・？」

「ああ・・・どうかしたんですか？」

「いなくなっちゃったのよ・・・城にはどこにもいなくて・・・見かけたら連れて来てくれる？」

「はあ・・・まあいいですけど。いくつですか？その曹操ちゃんは？」

おそらく原作の12年前だから6、7歳くらいははずだ。原作じゃみんな18歳超えてたし。

「ええ、7歳よ。しっかりしてる子なんだけど・・・いかんせんまだ子供だから・・・」

「ああ・・・分かりました見かけたら連れてきます。では・・・またな、  
一刀・・・」ぼそっ

「!・・・ああ、またな!!」

俺と一刀はそう言って別れた。いい奴だねえ・・・一刀は。

・  
・  
・

で、今俺は困惑している。  
なぜなら・・・

「えと・・・どうしたの？君・・・名前は？」

「曹・・・猛徳・・・」ぐすっ

そう、曹操ちゃんに会ったからだ。しかも泣きつかれている。  
なぜこうなったのか、説明しよう。

\*



「さて・・・と。曹映さんの領地は抜けたけど・・・曹操ちゃんは一見見たかったな。ははは・・・」

そう言っつて領地の外の森を歩く。

かなり歩いていたが、日も暮れている。村も見えないので野宿の準備をしていると

「んー!!!んー!!!」

「こらっ!ガキ!大人しくしやがれ!!」

とそんな声が聞こえた。まあ、この性格上助けないわけも行かない。声の方に歩いて行くと、そこには小さいが5、6人くらいは入れそうな小屋があった。

そこからさらに声が聞こえる。

「もういいから、殺しちまおうぜ。このクソガキ」

「ん・・・確かに、奴もさぞ悔しがるだろうな!」

「んー!!!んー!!!」

はあ、行くか・・・!!

ドカツ!!!

入口のドアを蹴り壊して入る。そこには拘束された幼い少女と取り囲む3人ほどの男がいた。その内2人は武器を構えてこちらを見ている。・・・クズだなこいつら。Yes!ロリ!Noタッチ!という言葉を知らんのか?

「なんだ！てめえ！」

「邪魔するな！なんならお前から斬り殺してやる！！」

そう言つて武器を持っている二人が斬りかかつてくる・・・が遅い。

チンツ！

と鐸鳴りの音が響く。俺が刀を鞘にしまった音。

すると、二人は腹から血を噴き出して絶命した。残りの一人は怯えながら逃げようとしたが、綱糸で首を落とす。

そしてその中心にいる拘束され、泣いている短い金髪の女の子に近づく。

「ん・・・んー！！」ぼろぼろ

「大丈夫、俺は君に何もしないよ。大丈夫かい？」スルツ

拘束を解いてやる。

「けほつ・・・あ・・・あなた・・・だれ・・・？」

「ん・・・正義の味方さ」

そういつてほほ笑む。すると安心したのか気を失ってしまった。それを支え、抱き上げる。

よほど怖かったんだろう、そして俺は野宿しようとしていた場所まで戻る。

「さて・・・火でも焚いて、まずは食糧だな。ま、別空間に入ってるから困らないけど。」

俺はその日少女に毛布をかけて寝かせてやり、飯を食べて眠った。

・

・

・

で、翌朝。川があつたので水を汲んでいると泣き声が聞こえた、少女が起きたようだ。

それで戻ると、少女と目が合う。その少女は俺を見つけると近づいて抱きしめてくる。

で、最初の場面になるわけだ。

\*

「ん？じゃあ、きみが曹操ちゃん？」

「え・・・？私を知ってるの？」

朝食を二人で食べている時にそう聞くと、曹操ちゃんはびっくりした顔でそう言う。

「ん、まあ曹映さんに聞いたからね。」

「お母さん・・・?」

「そ、きみを見つけたら連れてく様に言われたからね。」

そついうと曹操ちゃんは安心したように笑った。

・・・この子が将来・・・百合になるのか・・・なんだかなあ・・・

「じゃあ、曹操ちゃんはなんでこんなところに?曹映さんの領地からはかなり遠いところだけど此処。」

「えと・・・勉強してたんだけど・・・嫌になって飛び出して来たら・・・昨日の人達にさらわれて・・・気が付いたらココにいたの」

「・・・そっか」

俺は曹操ちゃんに近づく。そして抱きしめて安心させるように言った

怖かっただろう?頑張ったね、よく頑張ったね。

すると曹操ちゃんは抑えていた感情を吐き出すように、ぼろぼろと大粒の涙を流した。

・  
・

「落ち着いた？」

曹操ちゃんは何も言わずに「くん」と一つうなずいた。

「そうか、それじゃあ。お母さんの所へ連れてってあげる。歩けるかい？」

「うん」

「じゃ、行くうか。何かあったらすぐに言ってね？」

「うん／＼／＼」

顔が赤い、熱でもあるのだろうか？そう思い、曹操ちゃんの額に手を当てる

「ふえ！？／＼／＼」

「ん、顔が赤いから熱でもあるのかと思ったけど・・・大丈夫そうだね」に「うん」

「／＼／＼／＼」

うんむ・・・ますます顔が赤い。この先大丈夫だろうか？  
そう思いながら、二人で歩く。

「曹操ちゃん」

「あ、あの！」

「え？な、なに？」

急に曹操ちゃんが声をあげる。驚きながらも聞き返す。

「あの・・・華琳って呼んでください・・・！」

「でも・・・それは真名だろう？いいのかい？」

「はい・・・い、命を救ってくれたし・・・その・・・／／／／／」

まあ、預けてくれるのはうれしい。ありがたく受け取っておこう。

「うん分かった、いいよ。あ、俺の名前教えてなかったね。俺は性を風、名を風、字を衝って言うんだ。じゃあ、俺も真名を預けよう、俺の真名は桜花。よろしくね華琳ちゃん」

しゃがんで華琳ちゃんの目線に合わせ微笑んでそういった。すると華琳ちゃんは顔を赤くしながらも言った

「は、はい！よろしくお願いします！お、桜花さん！／／／／／」

顔真っ赤・・・ああ、照れてるのか。可愛いねえ、微笑ましいよ。

そんなこんなで、真名を交換した。

・  
・  
華琳視点

\*

私は、今ある人と故郷に向かって歩いている。

先日勉強が嫌になり飛び出したところ、賊にさらわれた。

そして抵抗していたけど・・・子供の力では大人の男の3人は振り払えなかった。

しびれを切らした賊達は私を殺そうとした。その武器の煌きが私の恐怖心を奮い立たせ、身体を硬直させた。

「んー!!んー!!」

私はそんな状態で精一杯叫んだ。涙を流しながら、助けて!とそうして遂にその刃が振り下ろされそうになった瞬間

ドカア!!!!

扉を破壊して見たことない服を着た男の人が入ってきた。

そしてそれを見た賊の二人がその人に斬りかかる。私は目を瞑った。しかし

「遅い」

そんな声で目をあけると男の人は立っていた。すると傍に居たもう一人の賊が急に青い顔で逃げていくすると、その賊は急にふらりと

倒れた。みると首が体から離れている。

「ん・んー!!」ぼろぼろ

怖かった。次は私が殺されるんじゃないかと思ったから。すると、その男の人は優しい声で私の拘束を解きながら言った。

「大丈夫、俺は君に何もしないよ。大丈夫かい？」スルツ

それで喋れるようになった私は聞いた

「けほっ・・・あ・・・あなた・・・だれ・・・？」

「ん〜・・・正義の味方さ」

そう答えた男の人の笑顔を見て、私は意識を失った。

そして、今その人が私は好きになった。その笑顔が余りに綺麗だったから。一つ一つの仕草がとてもかつこよく見えたから。そして勇気を振り絞って、真名を預けた。するとその人は笑顔で私の目線に合わせてかがみ、桜花という真名を預けてくれた。

\*

「でだ、華琳ちゃん。」

「なんですか？桜花さん」

桜花さんが真名を呼んでくれたことに少し嬉しく思いながら聞き返す。



「華琳ちゃんはどうして飛び出してきちゃったのかな？」

「あ・・・やっぱり勉強が嫌になったから・・・」しゅん

少し落ちこみながら言う。

「そうか・・・まあ、根を詰めるのはあんまり良くないからね。でも勉強自体は悪いことじゃない。分かる？」

「はい」

「まあ、ほどほどにした方がいいんだよ。俺も曹映さんに言ってみるから、自分でも自分の考えをぶつけてごらん？言葉にしないと伝わらないこともあるんだから。ね？」

桜花さんの言葉は説得力があり、なぜか納得できた。

「はい！」

私は桜花さんの不思議と安心できる雰囲気さがさらに好きになった。

・  
・  
・

曹映視点

「あの子はまだ見つからない？」

「え、ええ・・・俺の方も見かけないですね・・・」

私は天の御使い、北郷一刀に先刻から何度も確認している。昨日から食事ものを通らない。

「報告します！」

すると一人の兵士が入って来る。

「どうしたの？華琳は見つかった？」

「はっ！そのことでございますが・・・曹操様が何者かにさらわれたらしいとの報告が・・・」

「なっ！？それはいつの事！？」

「はい・・・昨日の昼ごろだと・・・」

兵士は言いづらそうにそういった。私はその余りの衝撃に脱力する。

「そ、早急に探し出してくれ！」

なにも言えない私に代わって北郷がそう言つと、兵士は了解と去っていく。

「華琳・・・」

「曹映さん・・・大丈夫さ！きっと大丈夫・・・！！」

慰めてくれるが、私はなにも聞こえなかった。

・

・

・

桜花視点

さて・・・華琳ちゃんと共に曹映さんの領地に戻ってきた俺こと桜花。

「さて、帰ってきたね。」

「はい」

「曹映さんも心配してるだろうし、さっさと帰ろっか」

「はい！」

で、華琳ちゃんの家に向かって歩いていたら、  
困まりました。Why?何故?

「あのー？一体なんの騒ぎです？」

「黙れ！曹操様をさらったのは貴様か！！」

あるえ〜？華琳ちゃんをさらったの俺になってない？

「・・・あの・・・俺、その華琳ちゃんをさらった奴のして連れてきた  
んだけど？」

「曹操様の真名まで！？貴様！どこまでも無礼な奴！！」

話し聞いてよ・・・

「なあ、華琳ちゃん・・・これどうすればいいのかな？」

「さ・・・さあ・・・せめて母が来てくれれば・・・」

幸いなことに華琳ちゃんが俺のそばに居るせいか中々かかってこない。つまり硬直状態だ。

「ん〜・・・」

と、考えていたら。

「華琳！！」

「母上！！」

と曹映さんが来た。

曹映さんは俺を見ると兵士を下がらせた。

「え〜と・・・貴方が華琳を？」

「え？それはさらったのか？と聞いてます？」

「い、いえ助けくれたのかと・・・」

「そうですね。殺されそうになったのを助けて、曹操と聞いて約束通り連れてきたんですよ。」

「あ、ありがとう！！」

はあ・・・この兵士は話を聞かないと記憶しとっつ。

「いえいえ、では俺はまた行きますね。」

と踵をかえして行こうとすると

「華琳様をさらったのはおまえかあああああ！……！！……！！」ブン！  
！！！！

ガキーン！！！！

「え〜・・・なに君・・・？」

なんか襲われました。

一話にして別離！？そして出会う曹操（後書き）

最後のは原作でも華琳様主義なあの姉妹の姉です。

**夏侯惇登場、旅の始めと惨劇（前書き）**

今回は、曹操さんところから出発します。

## 夏候惇登場、旅の始めと惨劇

今、俺は困惑中である。  
なぜなら……

「えと……もつかい聞くけど……きみ誰？」

「我が名は夏候惇！華琳様の矛にして楯！そして！貴様を殺す相手だ！！」

不意打ちよろしくさらに連打で体に見合わない大剣を振るう少女、  
名前は夏候惇と言うらしい。

つまりは原作で華琳ちゃんの右腕だったあの子ですね？

「で、それは分かったけど……なんで俺が攻撃されてるの？」

その攻撃を軽く受け流しながら問う。幸いまだ扱い慣れてないのか、  
剣の腕は未熟だったので俺の相手をするには幾分幼い。

「貴様が華琳様をさらったからだ！！」ぶんぶん！！

「ちよつ……それ勘違いじゃん……！！……仕方ない……ふつ  
！！」「ギイン！！」

俺は大剣を持つ夏候惇ちゃんの腕の隙間に刀を滑り込ませ、峰で柄  
をはじく。

すると簡単に大剣はその小さな手からこぼれおちた。

「あつ……き、貴様……！！！」



「そこまでよ、春蘭・・・」

「え？か、華琳様？」

「ちよつと来なさい・・・」「ずいじい・・・」

なんか華琳ちゃんに黒いオーラが見えるんだけど・・・怖っ！  
で、華琳ちゃんが夏候惇ちゃんを連れてどこかへ行ってしまった後、  
曹映さんが詫びてきた。

「悪かったわね、あの子華琳の事になると周りが見えなくなっちゃ  
うものだから・・・根はいい子なのよ？頭はよくないけど・・・」

「いえいえ・・・それとそこに居る子はどうしたのかな？」

俺は、俺の後ろの方・・・夏候惇ちゃんの来た方に隠れている少女に  
問いかけた。

その子はおずおずとした感じで出てくる。

「あ・・・夏候淵です。さっきの夏候惇の妹です。」

「へ・・・君は元気な夏候惇ちゃんとは違って大人しいんだね？そ  
れでどうかした？」

俺は、華琳ちゃんの時同様視線を合わせて話す。

「えと・・・さっきは姉が失礼しました。ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げ謝る夏候淵ちゃん。ちよつとびっくりしながら

も優しく言い返す。

「気にしないで。それだけ華琳ちゃんを大事に思ってるんだろっさ。」

「……ありがとうございます。」

ふむ……昔の夏侯淵ちゃんは結構口数が少ないんだねえ……でも凛々しい顔してる。

「あの、風華さん？ちょっと良いですか？」

曹映さんが話しかけてくる。

「なんですか？」

「あ、北郷もいい？」

「あ、ああ。いいよ。」

「それで、風華さんと北郷には華琳を助けてくれたこととこれから私と共に歩んでくれることで真名を預けたいのだけど……良いかしら？」

ん？……どうやら曹映さんは俺達に真名を預けてくれるらしい。これは嬉しいじゃないか。

「もちろん良いですよ。俺の真名は桜花です。あなたに預けましょ」

「あ、ああ・・・俺は一刀だ真名はないからこれが真名になる・・・の  
かな？」

「桜花に・・・一刀・・・確かに預かったわ。私の真名は縁華。よろし  
くね！」

曹映さんはとてもいい笑顔でそう言った。すると俺の羽織をくいく  
いと引つ張る者がいる。

下を見ると夏候淵ちゃんが居る。

「どうしたの？夏候淵ちゃん？」

「私もお礼に・・・真名を預ける・・・私は秋蘭」

「・・・いいの？」

俺は急なことに少し驚いたが、そう聞く

「いい。華琳様を助けてくれたから。」

「そっか、じゃあ秋蘭ちゃん、俺の真名は桜花だ。よろしくね」に  
こっ

目線を合わせて笑顔でそう言うと。秋蘭ちゃんは少し赤くなりながら

「よろしく願います・・・／＼／」

そう言った。華琳ちゃんといいどうして赤くなるんだろうか！

「ん、それじゃあ俺はそろそろ旅に出ますわ。じゃあ、今度こそま

たな一刀」

「ああ、またな桜花」

「じゃあ、失礼します縁華ちゃん。秋蘭ちゃん」

挨拶をして踵を返す。その時に縁華ちゃんがちゃん付けで呼ばれたことに少し赤くなっていた。

・

・

・

街の出口に着くと、華琳ちゃんと夏侯惇ちゃんが居た。

「桜花さん、言っちゃうんですか？」

華琳ちゃんがしゅんとした感じで言う。というかあの未来の霸王さんに敬語使われてるよ俺・・・結構すごいことじゃない？

「ああ・・・そんな顔しない、大丈夫また来るさ。」

「本当ですか！」

華琳ちゃんの顔がぱあつと輝く・・・が夏侯惇ちゃんがこちらを見ている。

「えと・・・さつき秋蘭ちゃんに会ったよ。姉がすいませんってね」

「うぐっ・・・秋蘭に会ったのか？それに真名まで・・・」

「うん、最後の方顔が赤かったけど・・・あの子風邪でも引いてるの？口数も少なかったし。」

俺は二人に聞いてみる、今思えば夏候淵ちゃんの様子は軽い風邪と言われても信じるかもしれない。

「・・・ぶつぶつ・・・まさか・・・秋蘭まで・・・？」ほそほそ

華琳ちゃんは少し悩む様になにかをつぶやいている。夏候惇ちゃんは少し考えた後

「まあ、大丈夫だろう！なんせ私の妹だからな！」

開き直った。

「じゃあ、俺はそろそろ行くよ。またね華琳ちゃん、夏候惇ちゃん」

「まで！私の真名も預ける！私は春蘭だ！」

「おお・・・いいのかい？・・・それじゃ俺は桜花だ。よろしくね？」

やっぱりかがんで目線を合わせて言う。

「お・・・おお・・・／／／」

やっぱり赤くなった。・・・なんだろう？華琳ちゃんから鋭い視線が・・・

なぜ俺が目線を合わせるかって？それは真名を交換するなら対等だ  
と思っっているからだよ。性別も年齢も関係なく対等な目線で関係を  
築きたいからだよ。

「それじゃ、またね。」

そうして俺は後の魏と呼ばれる地を出た。

・

・

・

しばらく歩き、華琳ちゃんと出会った場所らへんまで来た。

村はどこにあるか聞けばよかったと後悔する桜花君だったのだ・・・  
はあ・・・

「ん〜・・・それにしても・・・どこに行こうか。あと12年もあるし  
なあ・・・原作まで。取り合えず孫策ちゃんトコとか董に卓ちゃん各  
村に行ったりして過ごそうかな。」

さらに桜花は歩いていく。

「んん？なんだか物騒な雰囲気だな・・・」すっ

桜花の顔が少し険しくなる。すると進行方向から

わー!!!.....きゃあああ!!!.....があああ!!!

と叫び声が聞こえる。どうやら村が襲われているようだ。俺は出来るだけ急いで村へと駆けた。

.....

とある村

ある少女視点

くっ.....なぜ.....なぜこんなことに.....!!

私の村は今、賊達に襲われていた。多くの村人だ逃げていく中、仲の良かった友人やおじさん、おばさんが目の前で死んでいく。すでに私の顔はくしゃくしゃになっている。涙と恐怖心から来るからだの震えが止まらない。

「うっ.....ぐす.....」

私の父と母、兄が武の心得を持っていて、賊の討伐に当たっている。私はまだ幼く何もできない、よって家の中に押し込められた。

「ぎゃああああ!!!」

その声に私は顔をあげる、聞き慣れた声・一層不安と恐怖が募る。  
そして目に入った光景は、兄が首から血を噴き出し倒れ駆け寄った父と母が賊に刃を突き立てられたところだった。

「ああああああああああああああああああ!!!!~!~!~!~!~!~!~!  
!!!」

叫ぶほかに私は出来なかった

.....

三者視点

村に着くと、目の前で殺される親子？達。そして一拍遅れて響く叫び声

「ああああああああああああああああああ!~!~!~!~!~!~!~!  
!!!」



その声に気付いた賊が一件の民家に入っ  
て行く。だが黙って見ていられるほど、桜花の心も穏やかではなかった。

民家に近づいて中を見ると、賊が黒髪の少女の腕を掴んで下卑た顔で連れて行く様子としていた。

「いやっ！はなして！！」

「へへへ・・・大人しく来い！クソガキ！！」

そのやりとりで俺は中に入り込む。

「その子を離せ、このクズ野郎」

静かな声でそういった。

「ああ？なんだてめえ？まあ、いい野郎には興味ねえんだ！死んでくれや！！！！」

男はそう言って血がべっとりついた刃を振りおろしてくるが

その刃は届かずに、男の命が終わる。

男は、叫ぶこともできずに一瞬で絶命した。

桜花はただ、刀で斬り伏せただけなのに、男や少女は何をしたのか

分からなかった。

桜花は少女に近づき、優しく言った。

「もう大丈夫だ」

少女は、その顔に安心し両親や兄の事を思い出した。

悲しみて心が壊れそうになる、そんなとき自分を包み込む温もりがあった。

「悪かった・・もう少し・・早く来ていれば・・すまない、だから今はその悲しみは俺が受け止めよう。」

その言葉で少女は吹っ切れ、桜花の胸の中でただただ泣き叫んだ。

「うわあああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

桜花はその少女を泣きやむまで、抱きしめ続けた。

**夏侯惇登場、旅の始めと惨劇（後書き）**

最後の少女は、次回明らかになりますが、ヒントは黒髪、賊のトラ  
ウマ、未来の劉備軍の将です。

## 出会う関羽、決意する桜花（前書き）

ちなみに、この桜花君は魔法、魔術、超能力、過負荷・異常、忍術等は一部をのぞいて使えません。詳しくは主人公設定を次辺り書きます。

## 出会う関羽、決意する桜花

少女を落ち着かせた俺は、生き残っていた村人と村長の所へ案内してもらった。

そこで少女と俺と村長で少し話をしている。

「それで、この村の状況はどうなってる？」

「はあ・・・あまり芳しくありませんね・・・村人も約半数が死んでしまいました・・・」

「そう・・・ですか」

思ったよりこの村の状況はよくないようだ、賊は俺が全員倒したのて今は落ち着いているが、賊の本拠地にはまだ大勢の賊がいるだろう。そこを叩かない限り何度でも襲われるだろう。

「あ・・・」

考えていると少女が話しかけてくる。

「ん？なんだい？えと・・・」

そう言えば名前を聞いていなかったな。まあ、容姿から多少予想は着いているのだけだ。

「ああ、私は性を関、名を羽、字は雲長です。」

「そっか、じゃあ、関羽ちゃん？どうしたの？」

「はい・・・あの助けていただきありがとうございます／＼／＼」

「ん？・・・ああ、どういたしまして。怪我がなくてよかったですよ」ここに赤くなっている、まあ泣いているところを見られたのが恥ずかしいのだろう。

そう思いつつ、村長に話しをもどす。

「しかし、賊は拠点を構えているでしょう。そこを叩かない限りこれは何度でも繰り返されるでしょう。」

「ええ・・・それは分かっておりますが・・・いかんせん向こうの数が多くて・・・」

ん？・・・原作の時点で賊が勢力をつけ始めているのだが・・・既に勢力の多い賊もいるのか・・・

「どの程度です？」

「はい、約100名ほどの数です。」

「ふむ・・・では私が討伐してきましょう。」

「なっ・・・駄目ですよ！死んじゃいます！・・・！」

と、黙っていた関羽ちゃんが声をあげる。

「ああ・・・大丈夫だよ！関羽ちゃん。俺は強いから きっと君の村を守って見せるよ」

俺は、安心させるように笑顔で関羽ちゃんにそういった。

「……はい……でも、ちゃんと戻ってきてくださいね……？」

あ、泣きそうになってる。ヤバイ……それにしても……この子も  
一刀とおんなじ眼をしてる。うん……言い眼だ

「ああ、約束だ」

俺は親友とした約束をこの少女ともした。

「では、いいですか？村長殿？」

「え、ええ……いいのですか？」

「ええ、俺もここでちゃんとした決意を決めないと」

「決意……？……まあ、なんにせよお願いします。」

「はい、じゃあね関羽ちゃん。約束は守るよ」

そう言って俺は賊の討伐に向かう。

関羽視点

私は、不安だった。あの人まで死んでしまうのではないかと、しかし約束してくれた。必ず生きて戻ると。

だから私は信じて待つ。こんな時私の小さな手が恨めしかった、戦う力がないことが悔しかった。

だから私は、強くなるうと・・・決めた。

「村長・・・私は強くなりたいです・・・」

「それは・・・真か？本当にになりたいのか？」

村長がいつになく真剣に聞いてくる。

「はい！この村を、この国を！守れるくらいに！！」

「・・・分かった・・・お前の母より任された青龍偃月刀、今こそ渡そう。」

村長は私に母上から私に渡すように言われていたという青龍偃月刀を渡してくれた。

私はこれと共に強くなることを母に父に兄に、何より自分に誓った。



「さて・・・ココが拠点なわけだが・・・」

「あん？なんだてめえh・・・ぶがあー!!」

俺は見張りを間髪いれずに叩きのめす。

「さて・・・ココがお前らの墓場だ。覚悟しろ賊共」

そう言っつて俺は、中に入っつて行く。

すると中には村長の言っつとおり100名ほどの賊がいた。

「ああ！？なんだてめえは!!」

「怪しい奴！全員！やっちまえ!!!!」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!  
!!!!!!!!

全ての賊が一斉にかっつてくる。

だが、そんな極小の戦力は・・・

圧倒的な武力によって蹂躪される

人が吹き飛んでいく。桜花の一振りです人ほどがいつぺんに死んでいく。  
ただ繰り返される破壊の一撃。誰ひとり桜花を止める事が出来ずに恐怖した。

そして約半刻で、賊は壊滅した。

「……人を殺すのは、まだ慣れないな。いや慣れてはいけ  
ない。……さて村へ戻ろう。」

俺は村へ向かって歩き出す、背後には100人の墓が作られていた。そしてしばらく歩くと村へ着く。入口には関羽ちゃんが原作で使用していた青龍偃月刀を持ってたたずんでいた。

「……やあ、関羽ちゃん。その様子だと……やっぱり？」

俺は関羽ちゃんがこうなるだろうと思っていた。強くなりたいと思うのだろうと。

「はい、私はこの手で大切なものを守れるようになります。」

「そう・・・頑張ってるね」「ニコリ

「は・・・はい！！！！／／／／」

「そ、それですね！！貴方に、わわ私の真名を預かってもらえませんかかか！！？」

「落ち着け。真名ね・・・いいよ、俺の真名は桜花。よろしくな」

「は、はい！！私は愛紗です！！！！」

ちなみに、この愛紗ちゃんは現在7歳である。いい？身長的には俺の腰上あたりに頭があるからね？

原作の愛紗ちゃんをイメージしないでね？後々困るから。

で、そんなこんなで村長のもとへ報告するとしばらく居てくれないか？と頼まれた。

まあ、時間もあるから1、2年ほどなら良いと言ってこの村に住まわせてもらうことになった。

「はあ、でも住居どうしよじょ・・・」

「あ、桜花さん！」

「んん？愛紗ちゃん？どうしたの？」

「よければ私のうちに来ませんか！？」

「んん？いいの？」

「はい！そ、それで代わりと言ってはなんですけど・・・私を・・・鍛えてくれませんか！？」

「いいよ。1、2年間だけどよろしくね？」

「はい！..！」

そうして、愛紗ちゃんとの暮らしが始まった。

「はっ！今桜花さんに女の気配がしたような・・・！」

「華琳様！私もしました！」

「春蘭も？・・・今度来たら問い詰めないと・・・」

「仕事してくれよ」

「「うるさいぞ」

「はあ・・・桜花、結構つらいぜ・・・」の暮らして

出会う関羽、決意する桜花（後書き）

では、次は恋姫での主人公設定です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1811ba/>

---

世界を周るは転生者(チート) in 恋姫無双

2012年1月6日02時49分発行